

JUGEND

PHILHARMONIKER

ユーゲント・フィルハーモニカー 特別演奏会

—「第4回福島公演」代替公演—

SPECIAL

CONCERT

2020.10.25 ルネこだいら 小平市民文化会館 大ホール

ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニカー 特別演奏会にご来場くださ
いまして、誠にありがとうございます。

演奏会の副題、一「第4回福島公演」代替公演— にもあるように、当
初本日の演奏会は、当団にとって4度目となる福島県福島市での演奏会と
して実施を予定しておりました。当団は「『オーケストラが社会にどのよ
うに貢献できるか』を模索する」という理念に基づき、夏・秋期は10年
以上に渡り地方での公演を行ってきました。長野県の農村地区に赴き、普
段オーケストラを聴く機会のない皆様に演奏をお届けしたほか、福島の中
学生・高校生の皆様との共演を通して、東京でのアマチュアオーケストラ
活動を紹介する活動を展開してきました。

一方で、昨今の感染症拡大の影響は、オーケストラ、ひいてはアマチュ
アの我々にとっては大変厳しい状況をもたらしました。3月に実施した第
14回定期演奏会は、非公開での開催へと変更せざるを得ませんでした。
今回も、地方への大人数での移動は困難であるという判断から、公演地お
よびプログラムを変更し、今回の特別公演を実施する運びとなりました。

福島で当団の演奏を楽しみにお待ち下さった皆様には大変心苦しい思いですが、初めての小平の地で、1年以上の時を経て、当団の演奏をライブで皆様にお聞きいただけることを大変嬉しく思っております。感染防止対策を徹底の上公演を実施していきますので、どうか音楽に心躍るひとときを過ごしていただければと思います。

さて本日は、当団音楽監督の安斎拓志の指揮により、生誕 250 周年を迎えたベートーヴェン、福島出身のピアニストで当団との共演は 2 度目となる結城奈央さんとの共演でモーツァルト、そして当団の定期公演では初めて取り上げるメンデルスゾーン、3 人の名作曲家達による珠玉の名曲をお送りいたします。感染防止対策を踏まえた練習は通常と勝手が異なることも多く、手探り状態からのスタートではありましたが、団員一同この状況下で可能な精一杯の準備を重ねてきました。どうかお楽しみいただければ幸いです。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたりご協力いただきました多くの皆様、そしてご来場いただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

ユーгент・フィルハーモニカー 代表 湯田怜央奈

プログラム

L. V. ベートーヴェン：劇音楽《エグモント》序曲 Op.84

W. A. モーツァルト：ピアノ協奏曲第 21 番 K.467

— 休憩 20 分 —

F. メンデルスゾーン：交響曲第 4 番 イ長調《イタリア》Op.90

指揮 = 安齋拓志 ピアノ独奏 = 結城奈央

演奏中にスマートフォン等でパンフレットをご覧いただけますが、音が出ないように設定の上、画面を暗くするなど周りの方への配慮をお願いいたします。

指揮 安齋拓志

福島県出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島高校管弦楽団でヴァイオリンを始め、これまでに木全利行、篠崎史紀の両氏に師事。全日本高等学校選抜オーケストラに欧州公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団でコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の薦めで指揮活動を始め、卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学ぶ。



これまでに指揮を故佐藤功太郎、河地良智、湯浅勇治の各氏らに師事、数多くの演奏会の副指揮者・客演指揮者を務める。

2006年にユーгент・フィルハーモニカーを創設。農村でのオーケストラ演奏会を指揮するなど意欲的に活動し、読売新聞全国版に取り上げられる。2012・2013年には国立競技場でアイドルグループ嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。

現在ユーгент・フィルハーモニカー音楽監督。2017年からは全日本高等学校オーケストラ連盟の高校オーケストラ支援事業を担当、数多くの音楽事業をオーガナイズし青少年の音楽教育にも力を入れている。

ピアノ 結城奈央

福島県出身。東京藝術大学音楽学部器楽科卒業後、渡独。国立ベルリン音楽大学ハンス・アイスラーを最高点で卒業。ディプロマ取得。ヨーロッパヤマハ事業団による「ドイツ国内音楽大学生のための奨学金コンクール」にて奨学生に選ばれる。第18回カルレット国際ピアノコンクール優勝。第17回ブラームス国際コンクールピアノ部門優勝。



修了コンサートに選ばれ、Konzerthaus Berlin での演奏機会を得る。

これまで日本・ドイツ・スペイン・ニュージーランドにおいてソロリサイタル・ピアノコンチェルト・室内楽コンサートを開催。ピアノを手塚真人、田邊融、故三浦洋一、岡野寿子、佐藤俊の各氏に、室内楽を岡山潔、コンラート・リヒターの両氏に、歌曲伴奏法をコンラート・リヒター氏に師事。ベルリン音楽大学にて、ピアノ・室内楽を Michael Endres、Gabriele Kupfernagel、Stefan Picard の各氏に、歌曲伴奏法を Wolfram Rieger 氏に師事。Aviram Reichert、Kevin Kenner、Georg Sava、Henri Sigfriddson の各氏のマスタークラスを受講。

現在、演奏活動の他、各地でのレクチャーコンサートや後進の指導にも力を入れている。

ユージェント・フィルハーモニー

2006年、一般財団法人日本青年館の音楽行事（オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって創設されたオーケストラ。東京を拠点とし、全国各地の様々な高校や大学オーケストラの出身者約80名の団員を有する。3月の定期演奏会を中心に、「社会にオーケストラがどのように貢献していけるか」を模索するという当団の理念に基づき、福祉施設や農村への訪問演奏、各種イベントやテレビ番組での演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≡プロオケには出来ないこと）」を追求している。



曲紹介

L. V. ベートーヴェン：劇音楽《エグモント》序曲 Op.84

「楽聖」生誕から 250 年を迎えた本年、このようなメモリアルイヤーになることをいったい誰が想像しただろうか。奏者同士がソーシャル・ディスタンスを保たなければならないこのような状況下で、世界中のオーケストラが編成を縮小して演奏会を再開し始めた結果、今ではいつにも増して多くのベートーヴェンの作品が演奏されている。

その中でも、とりわけ本曲が演奏される機会が多い。元々はドイツの文豪ゲーテの同名の戯曲のために作曲された、序曲と 9 曲からなる劇付随音楽であるが、序曲だけでも劇全体の流れを凝縮した傑作であり、あまねく親しまれている。

曲は、大きく分けて 3 つの場面から構成される。

1. Sostenuto, ma non troppo

権力者の圧政を表す悲劇的な序奏が、2 分の 3 拍子のヘ短調で重々しく奏される。

2. Allegro

4 分の 3 拍子に転じ、せきこむようなテンポの中で、民衆の独立運動による闘争が激しく展開していく。

3. Allegro con brio

祈るような木管楽器のコラールの後、4分の4拍子のヘ長調に転じ、勝利のコーダで雄渾に曲が締めくくられる。本公演で唯一ピッコロが奏される場面であり、聴きどころである。

作曲から200年が経過した今でも、形は違うにせよ、人類は悲劇に直面している。ベートーヴェンのロックな旋律、そしてそれを再現する我々の演奏が悲劇に打ち克つ処方箋となれば、これほど幸せなことはない。

(高橋龍太郎)

W. A. モーツァルト：ピアノ協奏曲第21番 K.467

ピアノ協奏曲21番は1785年に、二短調協奏曲20番とほぼ同時期に作曲された。演奏機会も多い20番や23番が注目されがちではあるが、この21番もフリーの音楽家としてザルツブルグを離れたモーツァルトが、ウィーンの予約演奏会のための新作を次々と生み出さなければならなかった時期であり、最も多彩で豊作の時期の作品である。

21番協奏曲はハ長調ということもあり明朗明快、荘厳、喜びのあふれた楽曲である。20番の二短調の暗い激情からハ長調という晴朗とした調整を選んだモーツァルトはここで自分の楽器を存分に遠慮なく鳴らしてみたかったのかもしれない。

しかし短調の影も持っていないわけではない。例えば、一楽章で唐突に現れるのちの 40 番を思わせる短調のフレーズが第二主題へとつながる引き立て役となる。このフレーズはここでしか使われず、非常に気まぐれであるが、しかし実に計算されたものである。

オペラ作曲家のモーツァルトにとって協奏曲は彼の作曲技法を試すにはまたとない絶好の素材であった。彼の協奏曲はオペラとの関係性なしには説明できない。初期の協奏曲から、独奏の入りの様式や内容は予測できないものであり伝統を拒絶している。この 21 番も例外ではなく、さっそうと登場する独奏ピアノはここで初めて示されるフレーズを持って現れ、その後トリルでオーケストラの第一主題を導いている。

モーツァルトの協奏曲はまぎれもなく「歌」であり「劇」なのである。とはいっても独奏が技巧的にも極度な誇示に陥ることもなく、無類の平衡感覚によってオーケストラと独奏楽器との協調に破綻がない、実にバランス感覚に優れた曲である。

(市川徹)

F. メンデルスゾーン：交響曲第 4 番 イ長調 《イタリア》 Op.90

メンデルスゾーンはイタリアに訪問した際に見た景色や風物から着想を得てこの曲を作曲した。約 2 年かけてこの曲を完成させ、その年にロンドンにて自身の指揮により初演された。好評を博した初演だが、メンデルスゾーン本人は出来に満足せず改訂を試みる。しかし完成を見ることはな

く、出版されたのは彼の死後に初演で使われた第1稿とされている。そのため、第2、3番よりも先に作曲されているが第4番と名付けられている。



この水彩画はメンデルスゾーンがイタリアに訪問した際に描いたものだ。本作はこの絵にあるような陽の光がキラキラと輝く明るいイタリアのイメージが存分に反映されている。しかし長調で始まるこの曲は意外にも短調で終わっているところから、ただ明るいだけでなく、情熱的な面や哀愁漂う面も表現されている。是非、メンデルスゾーンがどのような風景を思って書いたのか想像しながらお聴きいただきたい。

第1楽章: Allegro vivace

弦楽器のピッチカートで幕を開けた後、木管の軽快な刻みにのせて、ヴァイオリンが明るく躍動感のあるメロディーを奏でる。明るく開放的なイタリアを彷彿とさせる楽章である。

第2楽章: Andante con moto

巡礼を想起させるような低音の歩みにのせ、木管の素朴かつ語りかけるようなメロディーが朗々と歌われる。メンデルスゾーンはローマやナポリで宗教行事を目にしており、その時の印象を表現した楽章だとされている。

第3楽章: Con moto moderato

メヌエットのような穏やかな楽章。詩情に溢れた優雅なメロディーが広く荘厳な景色を想起させる。中間部ではホルンが特徴的なリズムで遠くから呼びかけるように奏でられ、最後もホルンが終わりを告げるかのように奏でられ終幕する。

第4楽章: Saltarello. Presto

最終楽章はローマで行われた謝肉祭で踊る人々から着想を得ており、サルタレッコや中間部で用いられるタランテラというイタリアの舞曲を用いた楽章である。3連符を含むリズムが畳み掛けるように押し寄せ、情熱的、熱狂的なものを帯びている。短調でこれを描くことでより緊張感が感じられ、当時メンデルスゾーンがどれだけ強い衝撃を受けたかが窺える。

(宮本貴幸)